

| | |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | ニーバー再考：その歴史理解を中心に(ラインホルド・ニーバー研究：安酸敏眞氏報告) |
| Author(s) | 鈴木, 幸 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.3, 2013.3 : 20-20 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4478 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ラインホルド・ニーバー研究 安酸敏眞氏報告 ニーバー再考—その歴史理解を中心に—

2013年2月18日（月）聖学院本部新館2階会議室において、2012年度第6回目「ラインホルド・ニーバー」研究会が開催された。この研究会は日本学術振興会科学研究費補助金の基盤研究(B)「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」(課題番号：23320025、研究代表：高橋義文)の助成で開催され、総合研究所のラインホルド・ニーバー研究会との共催で行われた。北海学園大学教授、安酸敏眞氏より標記の題にてご発表いただいた。参加者は21名であった。概要は以下の通りである。

クラウター (Richard Crouter) によれば、ニーバーは準ヨーロッパ的センスを持っていることから、単にアメリカのコンテキストのみでニーバーを捉えることは出来ない指摘する。このことはニーバーの歴史のセンスにおいても同様であり、ヨーロッパ (特にドイツ¹) の経緯から考える必要があると言える。

そこでギルキー² (Langdon Gilkey) による、ニーバーの「歴史の神学」に対する解釈を見ると、ニーバーの弁証法は、時間的ではなく垂直的であるという。それは、超越性と関係性の弁証法である。ニーバーの歴史解釈では、人間の本性は歴史を通して

普遍であり、そのため未来さえも歴史の一部であり、本質的に新しいものとしては考えられない。また終末論の時間的な弁証法ではなく、垂直的な弁証法が終末論を規定していると指摘する。

またギルキーによれば、ニーバーは歴史の自己超越の能力が歴史を作ると考えた。そして人間理解と歴史理解には相互関係があることに留意し、歴史を考えるときには自由を深く考察する必要性を指摘した。自由には善と悪があるが、しかし歴史の本質は、神と人間のコンテクストから考えなければならない。神こそが歴史の問題を克服するのである。ニーバーの歴史理解は、哲学的というよりは、むしろ宗教的であり神学的であると言える。

ヨーロッパの歴史研究では、近代になり宗教的背景が薄れてきた。しかし、20世紀のアメリカで、ニーバーが歴史とは神が存在して支配している事実であること、神を抜かして考えてはならないことを説いたことは特筆すべきことである。

発表後の質疑応答では、弟リチャード・ニーバーも含めた研究の必要性や、ニーバー兄弟を比較する試みがなされてこなかった理由について、リベラル神学についての言及、ニーバーの歴史の捉え方がヨーロッパ的であると考えられる点について、またニーバーの今後の受容について議論され、盛況な議論のうちにお開きの時間を迎えた。



北海学園大学教授 安酸敏眞先生

- 1 ニーバーの父ゲスタフ・ニーバーは、ドイツ系移民のアメリカ人である。
- 2 ギルキーはティリッヒの助手であり、シカゴ大学教授などを歴任したが、彼のキリスト的象徴を呼び起こしたのはニーバーであったという。

(すずき・みゆき 聖学院大学総合研究所特任研究員)